

# 近代日本美術史と近代中国

2014年11月23日(日) 14時~17時10分

於：清華大学 甲所第3会議室

主催：清華東亜文化講座、渥美国際交流財団関口グローバル研究会 (SGRA)

協力：中国社会科学院文学研究所、中国社会科学院日本研究所

助成：国際交流基金北京日本文化センター、鹿島美術財団

## 【フォーラムの趣旨】

「美術」とその一部とみなされる「工芸」は、用語の誕生から「制度」としての「美術」「工芸」の成立まで日本の「近代」と深い関係にあり、そして近代中国にも深い影響を与えた。「美術」と「工芸」は、漢字圏文化と西洋文化との関係・葛藤を表していると同時に、日中両国のナショナリズム、国民国家の展開・葛藤とも深い関係にある。一方、「美術」と「工芸」の展開の仕方や意味づけにも日中の違いも無視できない。この違いはほかならず日中の「近代」の違いでもある。

本フォーラムは、美術史学と文学史・文化史の視点から日中両国の「近代」に焦点を当て、日本からの研究者の講演を中心に、中国の研究者の討論も交え、1日目は中国社会科学院文学研究所、2日目は清華大学で開催し、従来活発であったとはいえ日中近代美術・文化史研究交流のさきがけとなることを目指します。日中同時通訳付き。

## プログラム (第2日目)

14時00分—14時10分	司会：王中忱（清華大学中文系教授） 開会、挨拶：李薇（中国社会科学院日本研究所所長） 今西淳子（渥美国際交流財団常務理事）
14時10分—14時50分 【講演1】	脱亜入欧のハイブリッド：「日本画」「西洋画」、過去・現在 佐藤道信（東京芸術大学教授） 本発表では、まず第1に、近代日本の美術が、基本的に西洋化を進めながら、実際には日本・西洋・東洋、過去（歴史）・現在を編み合わせた、ハイブリッドのあり方がめざされたこと。そのため第2に、全体としては雑然とも見えるその複合性が、国際性やローカリティ、歴史性や現在性を、役割分担的に表象する多機能の柔構造として機能したことを、見てみたいと思います。つまり、そうした要因のいずれに対しても、近代日本美術の中のどこか、あるいは何かに対応しているシステムになっているということです。ただ、近代日本美術が西洋美術を移植する際、ポイントとなった事柄がありました。一つは、人間像中心の西洋美術に対応するため、肖像画や歴史画、裸体画といった西洋風のリアリズムによる人間像の創出が図られたこと。しかし同時にそこで、西洋美術の中心ソフトであるキリスト教は、周到に削除されたことです。発表は次の手順で行ないます。 1. 脱亜入欧 2. 西洋の移植—お雇い外国人 3. 西洋と日本の歴史の接続—歴史画 4. 「日本画」「西洋画」概念の成立 5. ジャポニズムと日本趣味 6. 人間像の創出 7. キリスト教の削除—「和魂」への置換

14時50分—15時05分 【指定討論1】	林少陽（東京大学総合文化研究科准教授）
15時05分—15時20分	（質疑応答）
15時20分—15時50分	（休憩）
15時50分—16時30分 【講演2】	「近代日本における〈工芸〉ジャンルの成立：工芸家がめざしたもの」 木田拓也（東京国立近代美術館工芸館主任研究員） 近代の日本において、造形芸術の一分野として「工芸」というジャンルが確立されるのは1890年頃のことだった。1889（明治22）年から翌年にかけて、帝国博物館（現在の東京国立博物館）、東京美術学校（現在の東京芸術大学）、内国勸業博覧会においてにおいて、「美術としての工芸」を意味する言葉として「美術工芸」という言葉が使用されるようになる。その背景には、西欧近代をスタンダードとする欧化主義に抗い、日本独自の近代化を成し遂げようとするこの時代のナショナリズムの高揚が作用していた。明治時代に西欧から輸入された「美術」概念を旧来の日本の造形ジャンルにあてはめ、「美術」と「工業」の中間的な、日本独自の造形美術の領域として新しく概念形成されてきたのが「美術工芸」だった。もっとも、「工芸」という用語自体は、明治時代に日本人によって発明された新語ではなく、技芸全般を幅広く意味する言葉として古来中国で使われてきた言葉だった。「美術」と「工業」の中間的な領域を意味する造形ジャンルとして新しく概念形成された「工芸」には、東洋の工芸文化の正統的な担い手として、東洋独自の造形表現のジャンルを確立しようと模索していたかつての工芸家の姿が反映されている。
16時30分—16時45分 【指定討論2】	陳岸瑛（清華大学美術学部副教授）
16時45分—17時00分	（質疑応答）
17時00分—17時10分	閉会、挨拶：劉曉峰（清華大学歴史系教授）

## 講師略歴

### ■ 佐藤道信 ☆ さとうどうしん ☆ SATO Doshin ☆

1956年生まれ。1981年東北大学文学研究科修士課程修了後、板橋区立美術館、1982年東京国立文化財研究所、1994年東京芸術大学に勤務、現在同教授。この間、1985～86年文化庁在外研究員（在米近代日本美術調査）、2000年ハイデルベルク大学非常勤講師。近代日本美術史が専門。近代日本画の研究から始め、欧米・日本での「日本美術史」観の違いの検証から、近代日本の「美術」の概念用語、美術行政、機構制度、欧米・東アジアでの「美術史」の構造分析などを行なう。著書：『「日本美術」誕生』（講談社メチエ、1996）、『明治国家と近代美術』（吉川弘文館、1999、サントリー学芸賞・倫雅美術奨励賞）、『美術のアイデンティティー』（吉川弘文館、2007）“Modern Japanese Art and the Meiji State, the Politics of Beauty”（Getty Publications, 2011）、共著『美術の日本近現代史 制度・言説・造型』（東京美術、2014）など。

### ■ 木田拓也 ☆ きだたくや ☆ KIDA Takuya ☆

1970年生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。佐倉市立美術館を経て、1997年より東京国立近代美術館工芸館勤務。現在、主任研究員。博士（文学）。

主な展覧会に、『加藤土師萌』展（1999）、『昭和の桃山復興』展（2002）、『日本のアール・ヌーヴォー1900 - 1923』展（2005）、『越境する日本人 工芸家が夢みたアジア 1910s-1945』展（2012）、『東京オリンピック 1964 デザインプロジェクト』展（2013）など。著書に、『近代日本デザイン史』（共著、美学出版、2006）、『美術史の余白に 工芸・アルス・現代美術』（共著、美学出版、2008）、『工芸とナショナリズムの近代—「日本的なもの」の創出』（単著、吉川弘文館、2014）など。近年の主な論文に、「『伝統工芸』と倣作：草創期の日本伝統工芸展の模索」（『東京国立近代美術館研究紀要』第15号、2011年）、「昭和の桃山復興：陶芸の近代、伝統の創出」（早稲田大学学位論文、2012年）、「Japanese Crafts and Cultural Exchange with the USA in the 1950s: Soft Power and John D. Rockefeller III during the Cold War (*Journal of Design History*, Vol. 25, No. 4, 2012)」、「大河内正敏と奥田誠一 陶磁器研究会／彩壺会／東洋陶磁研究所——大正期を中心に——」（『東洋陶磁』第42号、2013年）など。

## SGRAとは

SGRAは、世界各国から渡日し長い留學生活を経て日本の大学院から博士号を取得した知日派外国人研究者が中心となって、個人や組織がグローバル化にたちむかうための方針や戦略をたてる時に役立つような研究、問題解決の提言を行い、その成果をフォーラム、レポート、ホームページ等の方法で、広く社会に発信しています。研究テーマごとに、多分野多国籍の研究者が研究チームを編成し、広汎な知恵とネットワークを結集して、多面的なデータから分析・考察して研究を行います。SGRAは、ある一定の専門家ではなく、広く社会全般を対象に、幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動を狙いとしています。良き地球市民の実現に貢献することがSGRAの基本的な目標です。詳細はホームページ ([www.aisf.or.jp/sgra/](http://www.aisf.or.jp/sgra/)) をご覧ください。

## SGRAかわらばん無料購読のお誘い

SGRAフォーラム等のお知らせと、世界各地からのSGRA会員のエッセイを、毎週水曜日に電子メールで配信しています。SGRAかわらばんは、どなたにも無料で購読いただけます。購読ご希望の方は、ホームページから自動登録していただけます。